

## 与えられた仕事こそ天職

「自分の天職は何だろう」

誰でも一度は考えたことがあると思います。天職に関する私自身の経験、考えを、生い立ちからお話したいと思います。

私は旧富士郡芝川町柚野というところで生まれ育ちました。柚野は富士宮市西部にある中里山を越え、チサンカントリーを過ぎたところにあります。白糸の滝から下流へ4～5キロほどの位置です。

四季折々に表情を変える豊かな自然。澄んだ空気。そして何より、のどかな暮らしがそこにはありました。

最近では柚野にビオファーム松木の農場レストランができ、話題になっていますが、そのレストランの近くに洞窟があり、子どもの頃は恰好の遊び場でした。洞窟遊びには「入ったら生き埋めになってしまうかも」という恐怖感もあり、入り口を塞いでみんなが入れないようにしてしまった思い出もあります。そして、遊び疲れて腹が減ると、畑で芋を掘り、土を払って生のまま食べた記憶があります。

こうした天真爛漫な子ども時代は遙か彼方へ過ぎ去りましたが、今は亡き父や祖父、曾祖父、そしてこの柚野の大らかな自然に生まれ、現在の私があるとしみじみ感謝している今日この頃です。

小学生時代の私はこのように活発で、自己主張も強く、友達や女子を笑わせることが最も得意な子どもでした。特にコンプレックスもなく、伸び伸びと過ごしていたと思います。たしか将来の夢はパイロットでした。

ところが、中学生になるとまったく逆に、多くの劣等感を抱くようになりました。原因はいろいろありましたが、教師に徹底的に打ちのめされたことだけは、自分にとってプラスだったのか否か、今もわかりません。そのおかげで人生を大きく踏み外さずに済んだのか、それとも長年劣等感を引きずって生きるようになった根本か…。

中3の頃はその劣等感にさいなまれ、勉強する意識も薄かったので、卒業したら就職しようと思っていました。自分なりに「できることは何だろう」と考え、東京電力の訓練校や公営の職業訓練施設の資料を取り寄せて、就職への道を探っていたのですが、取り寄せ先から学校に連絡が入り、教師から高校へ進学するように改めていわれ、いやいや高校へ行くことになりました。

私の祖父は校長、祖母も教師でした。そして、父を始め親類、従兄弟は皆、富士高校へ入っていましたので、進学したものの「富士高へ行けなかった」という思いが重く心にのし掛かり、ますます劣等感は膨らんでいったのです。

「自分にできることなんて何もない。何もかもどうでもいい…」

夢のない高校生活。どんどん墮落しました。勝手にバイクを手に入れて無免許で乗り回し、拳げ句の果てにはそのバイクで友達が事故を起こし、大怪我をするなど、とことん親を困らせ、迷惑を掛けました。

それでも私を見捨てず、陰から守ってくれていた父。大好きな父が一筋の光でしたが、すさんだ私の心に追い討ちを掛けるように、高2のとき、父がガンで急逝しました。父という後ろ盾がなくなると周囲からの風当たりはとたんに強くなり、私はますます人生を恨みました。

「世の中には神様なんかいないんだ！神も仏もあるもんか！」

父を失ったショックは一生立ち直ることができないと思えるほど深いものでした。それでも高校卒業という現実が迫ってきます。またもや進路という鬼門をくぐらなくてはならなくなったわけです。ところが今回は選択の余地がありません。「父が元気でいてくれたら、東京へでも行って楽しくやるのに…」と思いつつ、父が残してくれた小さな小さな手作りめっき工場へ就職することになりました。

待ち受けていたのは、いつも私と距離を置き、突き放すように厳しい視線を投げかけてくる伯父たちでした。家業見習いとはいえ重労働で、少しでも弱音を吐こうものなら冷たく一瞥され、口を出せば生意気な奴だと無視をされ…。1年経った頃に辛抱の限界がきて飛び出してしまいましたが、3ヶ月間じっくり考えて、また戻りました。

「今の自分には他に選択肢はない」と腹をくくり、「それならば与えられた仕事を必死でやろう」と決めたのです。結果としてこのように考え至った3ヶ月があったからこそ、今があると思っています。これもまた宿命なのかもしれません。

与えられた仕事が一生の仕事。

与えられた仕事が天職。

決して憧れていた職業ではないし、自分の才能に合った職業として選んだわけでもありません。ある意味夢のない選択をやむなくしたわけですが、こう信じて目の前にある仕事をただただ必死にやり遂げてきました。もちろん失敗もありました。挫折を繰り返しながらも、今日までこうして続けてこられたのは、やはり私がこの仕事を唯一無二の天職と捉え、あきらめず前向きに取り組んできたからだと思います。

与えられた仕事に感謝

与えてくれたご先祖様、周りのひとたちに感謝。

今は心からそう思います。私は「自分にできることを必死にやる」ことで、宿命を受け入れ、自分にとって最良の人生を見つけることができたのです。

近年は、はばかりながら経営者の一人（はしくれ）として24時間365日、不安や葛藤と闘っています。時として不安に押し潰されそうになりますが、経営者なら誰でも同様に様々な不安を抱えていることでしょう。財務、業務、労務…何が欠けても沈没してしまう船を操縦して、嵐の海原を航海しているようなもの。できることなら逃げ出したい、夢なら覚めて欲しいと思っているのは、私だけではないと思います。

実際に2007年に起きたリーマンショックでの打撃は想像をはるかに超えるものでした。当社においては受注が直前実績の3分の1にまで落ち込み、正直、事業存続が危ぶまれ、2008年12月には一気に不安の谷底へ引きずり込まれました。このとき私が真っ先に心配したのは「この不安が障がい者のひとたちに伝わってしまうのではないか…」ということでした。当社は戦力として多くの障がい者を雇用しています。彼らに不安感を抱かせるわけにはいかないと、仕事の代わりになる何か有効な時間の過ごし方はないかと、気分転換も兼ねてサッカー部を結成することにしました。

2009年1月、本格的にサッカーの練習を始めましたが、さっそく立ちはだかったのがドリブルという壁。彼らは今までサッカー自体をする機会がなく、ドリブル

など未知の世界だったのです。それならばフットワークの基本、スキップからやってみようと挑戦するものの、それさえできないひとが大半…。ところが、そんな彼らが半年後にエントリーした県大会で見事準優勝に輝きました。なぜこれほど短期間で上達したのか、わかりますか。彼らも、指導する私たちも互いに粘り強い根気で毎日、毎日練習を積み重ねました。加えて彼らには体力や身体能力を上回る、普通では成し得ないことをやり遂げる力があります。その力を生み出すのが、彼ら特有の図抜けた素直さ、実直さです。これこそが短期上達のカギでした。

サッカーを仕事に置き換えてもまったく同じことがいえます。私はかねてから多くの障がい者が活躍している当フジ化学は『奇跡の職場』であると、胸中で自画自賛をしていました。ところが、このサッカー部の快進撃に直面したとき、「奇跡なんかではない。彼らの特性から考えれば優秀な人材となり得る可能性は十分ある」と気付かされたのです。

当社はまさに彼らの素直さ、実直さに支えられています。

事業は2009年1月、2月、3月、4月とどん底が続き、先の見えない真っ暗なトンネルの中を這いつくばっているような状況でしたが、じつはひとつだけ新規の受注計画が進んでいました。それは不況の予感さえなかった頃にスタートした計画で、2008年11月から具体的に動き出していました。当初1月の予定だった発注前の監査が、顧客メーカーサイドでこのような不況下に仕入れ先を移管する必要性があるのかと議論になり、3月まで延びてしまいましたが、結果は合格！晴れて5月に発注を受けることができ、ようやくどん底から回復の兆しが見えてきました。

この新規顧客は部品メーカーで、従来品の品質に問題を抱えていました。当社に課されたのは従来品を上回る精度の部品を製造すること。それを成功させたのは、紛れもなく障がい者の社員たちです。徹底した管理体制のもと、生真面目に、忠実に作業を実行してくれたからこそ、新規受注につながったと思っています。

これだけ素晴らしい働き手であるにもかかわらず、障がい者雇用に足踏みをする経営者が多い理由のひとつは「接し方がわからない」ということではないでしょうか。

一例ですが、毎朝出社してきても、半日以上立ったまま動かず、泣き続けていた障がい者の男性がいました。ずっと泣いているものですから涙と鼻水が糸になり、床までつながり…。それでも、泣き止みません。私は彼が泣き止むのをひたすら待ちました。彼も寝坊したり、くずったりしながらもタクシーで家族全員に付き添われながら、出社だけはしてきました。

泣き通しでも「帰りなさい」とも「仕事をしなさい」ともいわれず、ただただ泣き止むのを待たれていた彼は、やがて「言い訳をする必要がないこと」や「言い訳が通らないこと」を少しずつ悟り、一方私の方も「彼はここが自分の居場所だと思ってくれたようだ」など、少しずつ手応えを感じ、そういったお互いの根気が信頼関係となって、ついに半年後、止まっていた彼の時間が動き出したのです。社内のみんなの努力が実った瞬間でもあります。お金のためだけでなく「自分が自分であるためには働く必要がある」ということを直感的に知った彼は、どんどん仕事を覚え、今では我が社に欠かせない人材になっています。

もうひとつ、心に残る話をさせてください。

私が両膝の半月板と靭帯を損傷して、それが原因で膝に水が溜まり、さらに頸椎圧迫損傷による激痛、追い討ちをかけるようにぎっくり腰にまでなり、悲惨な身体で毎日の業務やら作業をしていた時のことです。

富士南中学校の養護学級からきた双子の兄弟である彼らは、私の作業をいつも目を離さずに見ていて、仕事を覚えようと一生懸命でした。そのときに私がしていた作業は知的障がい者には危険と思えるものでしたので、彼らにやらせるわけにはいきませんでした。「体がつらくても、危険なことは私がやらねば」そんな気持ちでいたとき、彼らの口から出てきた言葉に当時の私は勇気と感動をもらいました。

「社長、僕がやります！」

「危ないからダメだ」と答えましたが、彼らは熱く何度も、何度も「教える」と迫ってきたのです。熱意にほだされ、私は彼らを信じてみようと思い、作業を教えることにしました。

最初は目で覚えてもらおうと、何回も見させていると「できるからやらせてください！」と彼らの手が伸びてきました。しばらくは目を離さずに作業の様子を見守り、仕上りの確認、安全の確認を行っていましたが、やがて「これなら任せられる」と確信。それ以降、この作業は彼らの仕事になりました。

会社というのは経済的な目的だけでなく、こうした向上心や思いやりの心など、人間的で社会的なパーソナリティを養い、磨く場所でもあります。そして、会社を介して世の中とつながることができ、歴史や社会の中に自分の役割を見つけることができます。つながりの程度はともかく、会社に出れば、少なくとも共通の目的によって結びつけられたコミュニティに参加できます。私はどんな理由であれ、特定の誰かをグループから外すということはしません。

もし、社会で足場となる立ち位置を持たず、明日への目的もなく、生活の糧を自ら得ることができないまま年齢だけを重ねていったら、その人生はどうなるでしょうか。

障がい者への理解はひとそれぞれだと思いますが、本人の意思とは関係なく、何かと先回りして可能性を摘み取っているケースが多いように思います。働く力を持っているにもかかわらず、知的障がい者だから「合う仕事なんかない」「戦力にはならない」と決めつけ、施設に囲い込んでいる現状に、私は疑問を感じています。自立を阻む福祉があってはならない、このことはどうか真剣に受け止めてください。

当社は全社員の半数以上を障がい者が占め、健常者とともに相互に補完し合い、誰か抜けることがあってもすぐに対応できるよう、全体精鋭的な合同力を実現しています。いわば会社内で相互扶助社会が確立しているのです。

この会社を、全社員を私はとても誇らしく思っています。

この仕事が私に与えられたことに、感謝の念が尽きません。

最後にキャリアカウンセラーである戸田智弘さんの著書にありました、2人の哲学者の格言を紹介します。

生活はすべて次の2つから成り立っている。

したいけど、できない。

できるけれど、したくない。 ～ゲーテ～

この道を行けば、どうなることか、  
危ぶむことなかれ、危ぶめば道なし。  
踏み出せば、その一步が道となる、迷わず行けよ。  
行けば、分かる。 ～一休宗純～